

アメリカでの留学生活で感じた異文化

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2013-11-20 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 戎, 利光 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10098/7985

アメリカでの留學生活で感じた異文化

教育地域科学部 人間文化講座 戎 利光

今から35年ほど前、大学院修士課程（東京学芸大学）を修了した24歳の時、博士課程修了を目的に渡米しました。最初1年間はカリフォルニア州立大学大学院（ノースリッジ校）へ、その後ユタ州のブリガムヤング大学大学院へ移籍し、その3年後に博士課程を修了し博士号（教育学博士）を取得しました。合計4年間半のアメリカ生活でいろいろな事を感じ、人生観が大きく変わるほどの影響を受けました。その4年半の間は一度も帰国しないままで、日本社会に全く触れない期間となってしまいました。

ブリガムヤング大学大学院博士課程では、研究助手（Research Assistant：RA）を半年間し、その後2年半は助手（Graduate Teaching Assistant：GTA）をしながらの院生生活でした。GTAは福井大

学のTeaching Assistant（TA）とは違って、一人で講義（学部の科目）を担当し成績も付けますので、GTA全員がそれぞれ教員の一人として教育に携わりました。博士課程院生のGTA4人で研究室が1室あり、健康科学分野の研究活動を当時楽しく行い、そのGTA4人がほぼ同じ頃に博士課程を修了しました。

その中の1人Dr. Ted D. Adamsとは、現在も共同で研究活動を行っています。2001年、2002年、2007年と渡米し、アメリカで共同研究中です。その一端は、EXPRESS（福井大学広報誌、No.25, 2002、p.1）で紹介しました。英語をどのようにして学び、留學試験をどう克服し、RAやGTAとしてどのように採用されたか、或いは、博士課程での厳しいカリキュラム構成や博士論文の研究内容などについて

は、紙面に限りがあり本稿では割愛します。

海外からの観光客が多く西海岸にあるカリフォルニア州立大学では、留学生も多く日本からの留学生との交流も楽しみました。ところが、比較的田舎のユタ州にあるブリガムヤング大学では、当時留学生は非常に少なく、地域に海外からの住民もほとんど見られなく、完全にアメリカ社会での生活でした。その事が、アメリカ社会にとけ込むいい切っ掛けになったような気がします。

まず、アメリカでのレディファースト社会が印象的でした。ほとんどの建物の出入り口のドアは男性が開け、座る時には男性は女性の椅子を引いて女性が座りやすくするという習慣、車の助手席に女性が乗る時には、男性が助手席のドアを開けて女性を先に乗せてからドアを閉めて、運転する男性は歩いて車の反対側へ行き、自分でドアを開けて入り運転席に座って運転を始めるという習慣、車から降りる時も、男性が運転席から先に降りて車の反対側に歩いて行き、女性が座っている助手席のドアを開けて降ろしてドアを閉めるという行動は、ごく当たり前に見られる日々の光景でした。

このような光景は単に一例ですが、レディファーストの社会で、こういった光景を見たり家族で交流をしたりしながら、女性を守り家族を守る男性の強さを感じました。4年半の間毎日その習慣にすっかり浸っているとそうすることが当たり前のようになってしまい、帰国後福井でもしばらくはそのままでした。それを見ていた人には、かなりの違和感があったと思います。

また一方で、考えていることは相手に伝えていかないと、相手が察してくれるということはほとんどなく、とにかく積極的に発言をするようになってしまいました。意見を求められて黙っていることが賛成だと判断されるわけではなく、わからないんだと判断されることが多く、なぜ賛成なのか反対なのか、或いは、なぜ答えないのかを伝える必要がありました。

知人の子ども（小学生）が遊んでいて思わず近所の窓ガラスを割ってしまった時、子どもの小遣いでは弁償できなくて、子どもが自宅で作ったクッキーを地区のお祭りで売って、そのお金で子どもが弁償していたという光景を見て、子どもの自立心を育てるアプローチの違いも感じました。

ただ、本稿の後半は、私が24歳から29歳の間アメリカで大学院生として生活して感じていたことです。アメリカ社会で生活して全く異なったことを感じた人も多いと思います。今までと違った文化の中で生活を始めると、それぞれの文化についてその人なりにいろいろと考えると思います。その事が、その人には大きな心の財産になるような気がします。

20代にアメリカの大学院で培われた研究意欲が、40代でまた開花してしまい、再度博士論文の作成に至りました。ただ、2つ目の博士号（医学博士）は国内（愛知医科大学）での取得でした。これからも、研究活動と同時に、いろいろな地域の文化やいろいろな人の考え方に触れながら、心の財産を築いていきたいと思っています。